

# 歴史探訪

## クラブ

其の  
178

History Inquiry Club



文化財課 ☎ 27-1720  
(博物館) FAX 22-2028



●皿を投げる様子(当時の写真)

### 懐かしき空中皿投げ

昨年10月、久しぶりに権現の森から蔵王山を登りました。5合目にあたるふくしげ広場を過ぎ、うっそうと茂るタブノキ林を抜けると、あ

と一息で頂上です。6合目は、以前は下草とつるなどで雑然としていますが、今は刈り込まれすっきりしていました。何気に歩道の脇を見ると、素焼きのお皿の破片を発見しました。これは新発見の遺跡かもしれない、心躍り周囲を探すとさらに2枚の割れていない皿を見つけることができました。しかし、その皿をじっくり見た途端にがっかりしました。なぜなら明らかに新しい焼き物だったからです。新発見の遺跡の夢は破れたのですが、昔の記憶がよみがえりました。

直径6・2cmのこの皿の正体はかつてあった空中皿投げの皿だったのです。

昭和40年代後半〜50年前後、蔵王山頂は田原町の観光スポットとしてにぎやかでした。空中皿投げもその観光地を盛り上げる呼び物のひとつでした。蔵王山の斜面から空に向かって皿を投げることは爽快な気分です。観光協会の記録には、昭和50年には皿投げ大会、昭和52年には皿投げの教室もあり、かなり盛り上がっていたようです。写真はこの時期のもので

当時は、蔵王山に遊びに行っても皿を買おうお金もなく、皿が落ちて下りてこっそり拾い集めたものでした。観光旅行の経験もあまりない当時の子どもたちにとって拾った皿だとしても、皿投げは一時の観光気分浸れる夢のような贅沢な遊びでした。

今回の皿の発見でわかったことは、皿の内面に「厄除」と文字が押されていることです。つまり、この空中皿投げは単なるゲームではなく、本来は厄除祈願のものだったのです。このような皿投げは、各地の神社仏閣、また信仰地などで行われています。この手の素焼きの皿(かわらけ)は清少納言の『枕草子』に「清しとみゆるもの」として「かはらけ」とあります。一見粗末と思われるお皿ですが、一度しか使われない、清浄なものの筆頭に挙げられるもので



した。その皿を、聖地に向かい投げれば、厄除けなどのご利益があるとされます。空中皿投げは、そのような信仰とゲームが混合したものなのです。

当時はそんなこととはつゆ知らず、せっかく願いを込めて投げた皿をせっせと拾い集め再び投げたわけです。ひよっとしたら投げた方のご利益を無にしていたかもしれせん。ごめんなさい。

空中皿投げがいつ終わったかよく分かりません。今でもその跡地が散策道となって残っていますが、そこがその跡地だと言われても分からないかもしれません。

(増山)